
頼むからパパのことを聞いてくれ！

村雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頼むからパパのことを聞いてくれ！

【Nコード】

N7200Y

【作者名】

村雨

【あらすじ】

ありえない死に方をしてしまった俺。

死に方が面白いという理由で転生！？

もらった能力は二つ。でもそのうちの一つはこれから行く世界では

まったく使えない！？

まあがんばって生きていこう

更新は不定期です

ブログ的なもの（前書き）

初投稿です。

すごく短いです。まあいろいろおかしいところがあると思いますが
大目にみてください。

感想待ってます。でもあまりひどいことは書かないでください。
誤字脱字あったら指摘してください。

ブローグ的なもの

…ここはどこなんだ？

俺が意識を取り戻すと目の前に幼女がいた。

…なぜに幼女？

「あつ、やっと気がつきましたか」

いや、なんでこんなところに幼女が居んの？

「ああ、そういえば自己紹介がまだでした。私は神さまです。そしてあなたにはラノベの世界へ転生してもらいます」

は？転生？何で俺が？っていうか俺死んだの？

「はい、死んでいます。あなたが選ばれた理由がそれです。思い出してみてください」

えっと、俺は一人で暮らしていたはずだ。

んで、会社の同僚と飲みに行く約束をした。

そして出かけようとして筆笥の角に左足の小指をぶつけたんだ。

…ん、こっからの記憶がない！？まさか俺は筆笥に足をぶつけて死んだのか！？

「いえ、違います。実際はそのショックにより気絶。そして運悪く卓袱台に頭をぶつけて死亡しました。」

よかったよかった…ってどっちもどっちじゃねーか！

ん、さてよ、まさか俺が選ばれた理由これ？

「はい、そうです。あなたの死に方が面白かったからです」

おい！適当すぎだろそれ！

「まあいいじゃないですか。どうせ家族も居ないんだし」

…まあそうだが。…仕方がない、どこの世界に行くか教えてくれ

「それは内緒です」

…は？内緒？

「でもその代わりに好きな能力を二つあげましょう」

じゃあ一方通行のベクトル操作能力と黄金率をくれ

「分かりました。それではがんばってください」

最後にひとつだけいいか？

「何でしょう？」

結局俺はどこの世界に行くんだ？

「…まあいいでしょう。教えてあげます。

それは『パパの言うことを聞きなさい』です」

おいそこベクトル操作意味ねえだろ！

「家事全般は一流以上にできるようになってます。
それでは今度こそいつてらっしゃい」

「まあぐだぐだ言ってもしょうがない。行ってきまーす」

俺は目の前に現れた扉からでていった。

小鳥遊家での出来事（前書き）

今回も短いです。長いを書いている人のすごさが
小説書いてみて初めてわかりました。
誤字脱字あつたら指摘してください。

小鳥遊家での出来事

えゝ突然だが、俺が転生してからもう20年もたった。

なんだって？時間が飛びすぎ？だってとくに何もなかったんだから仕方がない。

本当に何もなかったかって？うーんそうだな

俺が生まれてすぐに両親が事故で死亡。

親類がいないんで孤児院に預けられるところだったのを親父の親友の瀬川さんが引き取ってくれ、俺は瀬川海斗になった。

それから一年位たって祐太が生まれた。両親はもちろん祐理姉や俺もすごく喜んだ。

それから数年たって父さんと母さんが死んだ。んでそこから大体原作通りなはずだ。

まあ原作と違うところといえば、俺の黄金律で金には困らなかったし

あの幼女のおかげで家事ができたから祐理姉の負担を減らせた。

後は祐理姉の趣味を偶然知ってしまい、強引に引きずりこまれオタク趣味を持つようになった。

まあ前世でも少しはオタクっぽかったからよかったが…

まあそんなこんなでいろいろありもう原作は覚えていない。まあいいか。精一杯がんばって生きていこう。

俺がこんなことを考えながら歩いていると目の前に表札があった。

「おお、これが小鳥遊家か」

俺はそんなことを言いながらインターフォンを押す。

「「いらつしゃい、おいたん海斗」」

そこには祐理姉とその娘ひながいた。

「遊びに来たよ祐理姉、ひな」

「そういえば祐太はどうしたの？」

「ああ、祐太なら用事があるとかで大学にいった」

「そう、残念ね。祐太をいじって遊ぼうと思ったのに」

「はは、また今度にしてあげなよ」

そんな話をしながら俺たちはリビングに向かう。

そこには空ちゃん、美羽ちゃん、信吾さんがいた。

「いらつしゃいお兄ちゃん」

「いらつしゃい叔父さん」

「やあ、よく来てくれたね海斗君」

三人に迎えられた俺はそのままイスに腰掛ける。

「そついえば海斗、お昼ご飯食べたの？」

「いや、まだだけど」

「ちょうどよかった。一緒に食べましょ」

そついうと祐理姉はキッチンのほうへむかっていった。

「あつ、手伝ってきますね。信吾さん」

「ああ、たのむ。ひさしぶりに君と祐理の料理を食べたい」

俺は祐理姉を追ってキッチンに向かった。

「祐理姉、手伝いにきたよ」

「あら、待っててくれてもよかったのに。まあ手伝ってもらいましょうか」

「何作るんだ？」

「ひなの大好きなハンバーグね。後はカルボナーラかしら」

「よし、カルボナーラは俺が作るから祐理姉はハンバーグ頼む」

「ふふつ、まかせたわよ」

「ああまかされた」

テーブルには出来上がったカルボナーラやハンバーグがのっている。

「わあ、どっちもおいしそう!」

「まったく、お姉ちゃんたら。まあほんとにおいしそうですけどね」

「ひな、はんばぐたべるー!」

「ほんとにおいしそうだね祐理」

「じゃあ、食べましょう」

「「「「「いただきまーす」「」「」「」」

「あーおいしかった!」

「お姉ちゃん食べ過ぎてない?」

「ななな何言ってるのよ美羽!!そんなに食べてないよお兄ちゃん!」

「えゝ、空ちゃんは俺の作った料理おいしくなかったのかな?」

「違います!おいしかったです!」

「ごめんごめんちょっとかわいかったからね」

「か、かわいい？……え、えへへ／＼／」

「あらあら、いいわねえ若いって」

「ま、まあ海斗君ならいいんじゃないか？」

「な、なに言ってるのよお父さん！／＼／」

「じゃあそろそろ帰るよ。」

「もう帰っちゃうの？おいたん？」

「うん、用事があるからね」

「また来なさいよ海斗」

「今日はありがとう海斗君」

「さようなら叔父さん。また来てください」

「またねーおいたん」

「また来てくださいねお兄ちゃん」

「ああ、また来るよ」

俺はそう言いながら自宅へと向かった。

路上観察研究会（前書き）

なんかいろいろおかしいですが、勘弁してください。
今回も短いです。

路上観察研究会

「佐古先輩、菜香、遅れてすいません」

「やっと帰ってきたのかね海斗君」

「おかえり海斗」

あの後、小鳥遊家をでた俺は家に帰り、ここ口研にやってきた。

「今年はどうですか？」

「ああ、すでに一人入ったのだよ！」

「そうですか。んでそいつはどこに？」

「すまない。忘れていたようだ。菜香君、仁村君を呼んできてくれたまえ」

「……わかった。」

何かを練習していた菜香は立ち上がり、新しく入った仁村を呼びにいった。

「佐古先輩、何か用ですか？」

「やあ仁村君、海斗君が戻ったから自己紹介してもらおうかと思っ
てね」

「仁村浩一です。よろしくお願いします海斗先輩」

「こちらこそよろしく。それと先輩はやめてくれ」

「分かりました。じゃあ海斗さんでいいですか？」

「ああ、それでいい。それにしてもなんで口研に？」

「いや、それがですね…その佐古先輩に無理やり…」

仁村がそう言ったとたん佐古先輩が慌て始めた。

「ぎくっ！ ななな、何のことだい？」

「…佐古先輩？ 人に迷惑かけたらいけないって言いましたよねえ？」

「ひっ、おおお落ち着くんだ海斗君、話せばわかる！」

「そうですね、O H a N a S h i しましょうか」

「い、いやだ、助けてくれ！ 菜香君、仁村君！」

佐古先輩はそう言うが、二人とも目を合わせようとしない。

「そ、そんな！ 何か言ってくれ菜香君、仁村君」

「……自業自得」

「ノ、ノーコメントで」

二人に見放された先輩はorzの状態で固まっていた。

「さあ、行きましようか先輩？」

「いやああああ！！！！」

先輩の叫び声が響き渡る。

「それで、今年入りそうなのはもういないのか？」

「……会長がもう一人いるって」

「そうなのか、俺はてっきり「そうなのだよ海斗君！もう一人は酔っ払って寝ているよ。」……」

先輩は今まで端っこに転がっていたはずなのに、急に会話に参加してきた。

とりあえず、なんかむかついたからもちかいボコっておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200y/>

頼むからパパのことを聞いてくれ！

2011年11月30日18時57分発行